

秋田赤十字病院 看護師発案プロジェクト

秋田赤十字病院(秋田市上北手)の手術棟は、秋田公立薬師大付属高専学医学生によるアートが施され

た。手術棟に彩りを添えて、明るい雰囲気をもち、患者らを和ませている。

秋田美大付高の有志、制作に協力

手術棟の入り口ロフト、ドアからオペ室へと続くスペースの壁一面に、色を塗って丸く切ったゲント紙を貼り付けた。オレンジ色や青、緑を加えて優しい色合いで、空や樹木を連想させる作品。3月19、20

日に当時の1、2年生有志24人が制作した。発案したのは、手術棟に勤務する看護師石井さん(34)。「手術棟の入り口ロフト立ち止まってしまうほど、緊張し不安を抱える患者もいる。

患者らの心癒やす力に

そんな患者の心を少しでも和らげたい。石井さんは、手術棟の無機質な空間にアートを宿すことで、患者や家族に癒やしを与えたいと考えた。昨年夏に病院でプロジェクトを立ち上げ、高専医に協力を依頼した。生徒らは実際に手術棟を見学するなどしながら、石井さんから聞いたイメージや要望を基に図案を検討。

石井さんと話し合いながら、手術棟にふさわしい「印象に強く残り過ぎないけれど、見る心地やされる図案」を目標に、試行錯誤した。生徒たちのリーダーを務めた藤田ひかるさん(17)は「いつもは自分が好きなものを描いているけれど、作品を見る人や、展示場所のことを意識して図案を考えた。良い勉強になった」と語り、教員の藤田悠

哉さん(42)は「生徒たちにとって、作品が社会に作用をもたらすことを体験する良い機会になった」と話した。

プロジェクトは「A+プロジェクト」と名付けられた。「秋庄」や「アート」の頭文字「A」に、「患者に少しでも力を貸されるように」との思いで「+」を付けた。石井さんは「A+」というコンセプトに合った優しい作品ができて、手術棟が明るくなった。今後も、地域と連携しながら院内の他の場所にアートを宿すことも考えていきたい」と話した。(日比野桃子)

手術棟、アートで明るく



完成した作品の群に並ぶ石井さん(左)と生徒たち

©秋田魁新報社

生徒たちは、紙を貼る前にも指板ながら作業を進めた

